

# 沖縄における戦跡観光に関する地理学的研究

小幡 美佳

キーワード：戦跡観光，戦跡，沖縄戦，平和教育，沖縄

## 1. はじめに

本研究では沖縄における戦跡観光に注目する。沖縄では、観光産業が盛んである。一般的に、戦跡を観光対象にすることはイメージダウンであると考えられる。また沖縄には戦跡しかないわけではなく、多くの観光要素も持っている。しかし、沖縄には戦跡観光と共存しようとする姿勢がある。そこで、本研究では戦跡観光に着目し、それが沖縄県においてどのような意味をもっているかを明らかにすることを目的とする。

2002年5月15日に、沖縄は本土復帰30周年を迎えた。そして、2002年から2011年度までの新たな沖縄振興計画の県案は、「平和で安らぎと活力のある沖縄」と「沖縄の特性を生かしたフロンティア型」をキーワードに挙げている。今までは、日本本土との格差を縮小することが目的であったが、その反面「沖縄らしさ」や「沖縄の独自性」というものは隠されてきたのである。その1つが沖縄戦や米軍基地だと考える。沖縄戦という日本唯一の地上戦を経験し、またその戦争により多くの住民被害が出たこと、戦争によって27年間のアメリカ統治があったこと、そして本土復帰した現在もお米軍基地と共存していることなどを強く発信していくべきだと考える。これこそが、戦後沖縄住民が願っていた平和への思いであって、沖縄らしさ、独自性につながる。その発信の具体的なものとして戦跡観光が挙げられるのではないかと筆者は考え、本研究で取り上げることとした。

研究方法としては、研究対象地域を沖縄県沖縄本島とし、戦跡観光を取り上げる。そのため、まず沖縄県の地誌を作成し、沖縄県全体を捉える研究の基盤を作る。そして、「観光」と「戦跡」という2つの視点から、沖縄における戦跡観光の意味を考察する。研究地域である沖縄県をより詳しく、正確に最新の情報を得るために、琉球大学の図書館や、現地の書店、沖縄県庁を利用し資料を収集した。また、より詳しく戦跡を調べるために沖縄本島南部を中心にフィールドワークを行った。

## 2. 沖縄における戦跡観光の意味

### (1) 沖縄における観光

今日の観光にとって、どのようなことが重視されるか考察した結果、観光の「観る」という意味を重んじた、地域を観ることであると筆者は考える。なぜなら、現在の観光は経済優先の消費的観光であったが、これからは人間中心の精神面での生産的観光が必要であるからだ。これは、人間中心の精神面での豊かさ、つまり地域を観ることから地域の歴史や文化や地域の人に触れ、地域理解をする観光なのである。そして、沖縄を（地域）を理解するうえで欠くことのできない要素として、沖縄戦が挙げられる。なぜなら、現在の沖縄は過去の辛い沖縄戦の上に成り立っているからである。そこで、沖縄を理解するためには沖縄戦を知り、そしてその戦争と現在をつないでいる戦跡観光を取り上げることにした。

次に、沖縄の観光について述べる。沖縄県にとって観光産業は、県経済を支える主要な柱となっている。現在、沖縄経済は県外受取額のうち、50%の財政資金と18%の観光収入を主体とした構造になっている。財政資金とは国庫などであり、これは依存型経済と言える。そのため、生産力の弱い県経済は観光産業への依存は避けることができない。まず沖縄における観光客数と観光収入について変化を見る(図1)。2000年において、観光客数は約450万人、観光収入は約400億円である。これは、1972年から比較すると観光客数・収入ともに約10倍の増加している。このように、観光産業は著しい発展をみせている。この沖縄における観光の歴史は、①終戦直後から約35年続いた墓参観光、②本土復帰(1972.5.15)後から約10年間の周遊型観光、③1980年から現在まで続くリゾート型観光の3つに分けることができる。本研究で取り上げる戦跡観光は墓参観光が原点であり、これは観光産業として始まったのではなく、純粋に戦没者を弔う墓参りから発展したものである。このように、観光の歴史は3つに分類できるが、沖縄の地域理解をする観光という点を重視した際、過去の戦争を知ることが必要と考え、次に戦跡観光について詳しくみていくことにする。

## (2) 沖縄における戦跡

沖縄県には多くの戦跡がある。これを研究対象地域である沖縄本島で戦跡の分布図を示す(図2)。この図によると、南部に戦跡が集中していることが分かる。これは、南部で沖縄戦の被害が多く出たためである。ここでは、まず沖縄における戦跡の役割について明らかにし、そのことが多くの人に知られるためにどのように戦跡が扱われているかを考察したい。

戦跡とは、戦争に関わって形成された構造物や遺構や痕跡、遺物のことである(池田、2002)。また、戦跡の役割として3つが挙げられる。①近代史研究・戦争遺跡考古学研究的資料、②歴史教育・生涯学習の教材、③平和・平和学習の物証・語り部の3つである(菊池・十菱、2002)。これをもとにして筆者は、沖縄の戦跡について次のように定義した。成立期間は、太平洋戦争(1941.12)から現在までであり、その期間において戦争に関わって形成された構造物や遺構、痕跡である。また戦跡の役割として、過去の戦争を知る契機となり、そして平和の語り部または次の世代に平和を伝えていくという点を重視したい。

また戦跡の成立期間を現在までとしたのは、米軍基地も戦跡の1つとして筆者は取り上げたからである。なぜなら、沖縄県の面積は国土面積の0.6%であるのに対して、米軍基地は沖縄県に75%を占めている。また本土復帰時には約2万8700haであった米軍基地は現在まだ約2万3800haも残っており、それは県面積の約10%を占めている。これは、沖縄と戦争の問題が続いていることを表している。つまり、米軍基地は沖縄戦で形成された戦争の痕跡であり、戦跡と言うことができる。

次に、戦跡の役割である平和を伝える点を考察したい。そのためには、単に戦跡が存在しているだけでは、その役割が多くの人に発揮されないため戦跡を観光資源として扱うことができる。なぜなら、負の遺産である戦跡は、過去を知る契機となり平和を伝えてこそ正の遺産となるからである(村上、2002)。では、観光資源として成立している戦跡はどのような条件があろうか。ここで、筆者は①経済価値、②交通、③他の観光地との隣接、④情報という4つの視点から、その戦跡が観光資源として成立しているか、沖縄県本島の南部を中心に戦跡10ヶ所を検討した。その結果、5つ(ひめゆりの塔、ひめゆり平和祈念資料館、平和祈念堂、沖縄県立平和祈念資料館、旧海軍司令部壕)の戦跡が観光資源として成立していることが分かり、これらは戦跡の役割である平和を伝えるということを果たしていると考えられる。つまり、観光資源となることで、戦跡の価値を高めている。

### (3) 教育における戦跡観光

ここでは、教育における戦跡観光について述べる。沖縄を訪れる修学旅行生は、2000年で約30万人であり、これは1985年が約5万人だったのに対して約6倍の増加となっている。修学旅行の目的として、沖縄での平和学習が挙げられ戦跡観光が行われている。これは、図3の10代の戦跡観光をする割合が他の年代と比較してとても高いことから分かる。それは、沖縄の戦跡が平和教育において有効な教材であることを示している。平和教育での重要な点は、①戦争を子どもの感情に訴えること、②戦争を過去のものとして認識させるのではなく、現在の自分の生活の一部として捉えることができるかという2点である。沖縄には、この第1の点、現存している戦跡（自然壕など）が現在も住民のなかに溶け込んでいることが、戦争のリアルさを増し、子供の感情に強く訴えることができる。そして、戦跡を通して「戦争絶対反対」と言う思いが平和への感情を導くことができるのである。このように、戦跡は単に現存しているだけではなく教育面でも、教材として活用されていることが分かった。

### 3. おわりに

沖縄における戦跡観光の意味について結論を述べる。沖縄において、観光は基幹産業となっている。そしてこの観光において、地域理解を最も重要だと定義した時、沖縄の観光のなかで戦跡観光がこの定義に非常にあてはまる。なぜなら、沖縄の地域を理解するうえで沖縄戦を抜きにしては語ることができないからである。そして、沖縄戦の痕跡である戦跡が観光資源として存在する。この戦跡を観光することで、つまり戦跡観光を行うことは沖縄の地域性を表している沖縄戦を知ることができる。この沖縄戦を重視する理由として、沖縄において戦争はいまなお続いているからである。それは米軍基地が沖縄戦の中で成立しており、現在の沖縄における戦跡と言える。これは、戦跡として存在しているのにもかかわらず、いまなお稼働しており過去のものになっていない。これは、沖縄全体にも共通していることであり、沖縄自体が生きた戦跡なのである。つまり、沖縄における戦跡観光は過去を知るというだけではなく、現在の沖縄を知るという点においても非常に価値があるのである。そのため、沖縄において戦跡観光が意味をもつのである。そして、沖縄での戦跡観光は教育の点においても、10代に浸透することで若い戦争を知らない世代が戦争と平和について考え、向き合うことの出来る大きな役割を担っているのである。

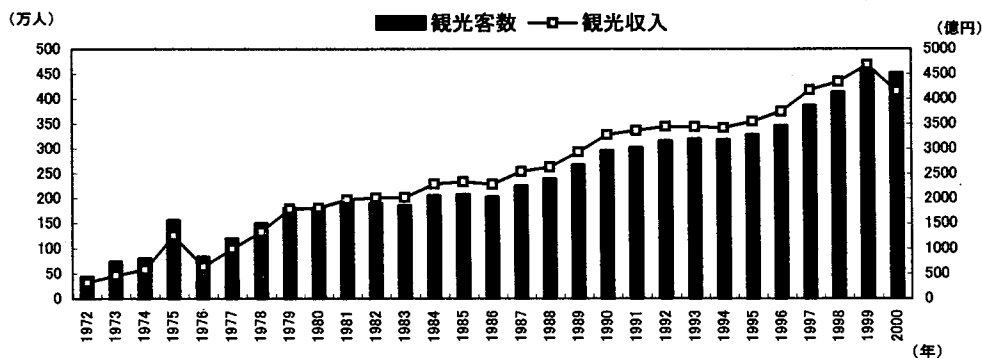


図1 沖縄県における観光客数と観光収入の年別変化  
出所:「沖縄県観光要覧 平成12年度」より筆者作成

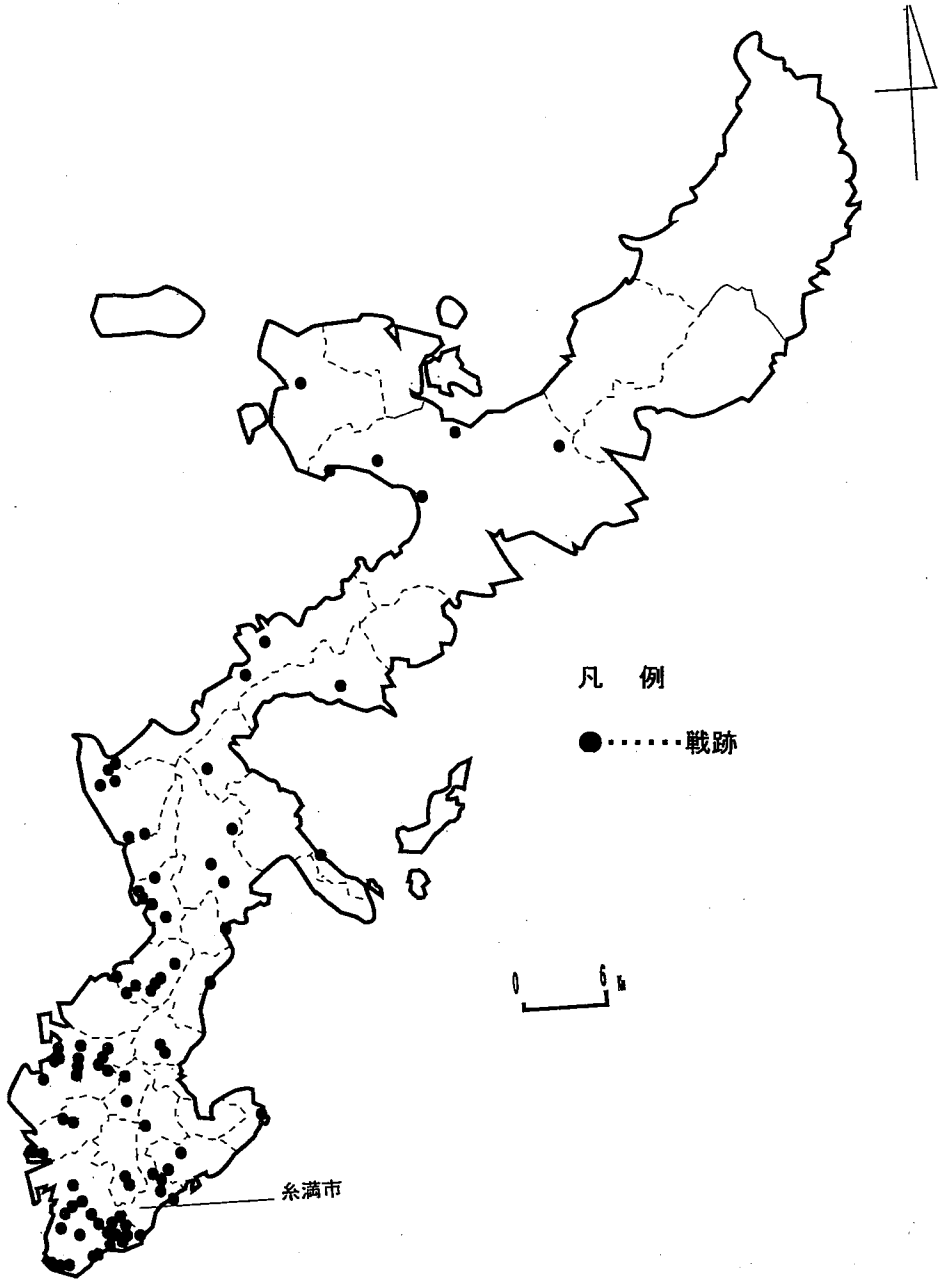


図2 沖縄本島の戦跡分布図  
 出所: 沖縄平和ネットワーク(1997)より作成

■10代 □20代 ▨30代 □40代 ▩50代 ■60代以上

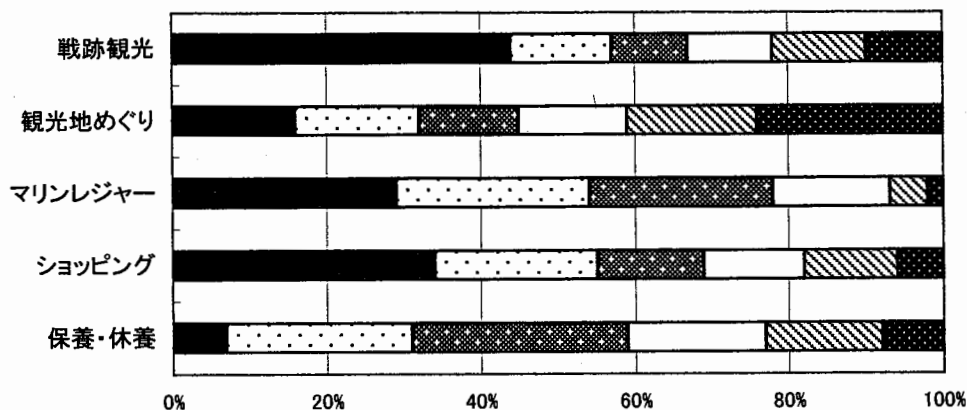


図3 沖縄を訪れる観光客の年代別旅行内容

出所:「沖縄県観光要覧 平成12年度」より筆者作成

<参考文献>

- 新崎盛暉 (1999):『沖縄 修学旅行』, 高文研, 278p.  
 大崎将保 (1992):『新版 観光コースではない沖縄』, 高文研, pp.53-73.  
 大田昌秀 (1997):『沖縄—戦争と平和—』, 朝日新聞社, 237p.  
 沖縄県教育委員会 (2000):『概説 沖縄の歴史と文化』, 149p.  
 沖縄平和ネットワーク (1997):『新/歩く 見る 考える沖縄』, 沖縄時事出版, 159p.  
 沖縄県企画開発部統計課 (2001):『平成13年 沖縄県勢要覧図』, 1P  
 菊地 実・十菱駿武 (2002):『しらべる 戦争遺跡の事典』, 柏書房 421p.  
 菊地 実・十菱駿武 (2002):しらべる 戦争遺跡の事典.伊藤厚史編  
 『遺構と遺物の調査法』, 柏書房, pp.29 - 38.  
 菊地 実・十菱駿武 (2002):しらべる 戦争遺跡の事典.池田一朗編  
 『戦争遺跡をして何を語らせるか』, 柏書房, pp.71 - 73.  
 菊地 実・十菱駿武 (2002):しらべる 戦争遺跡の事典.村上有慶編  
 『沖縄における平和学習の意義』, 柏書房, pp.76 - 79.  
 来間泰男 (1998):『沖縄経済の幻想と現実』, 日本経済評論社, 409 p..  
 国土交通省 (2001):『平成13年度版 観光白書』, pp.109-112.  
 城丸章夫 (1992):『城丸章夫著作集 第9巻 平和教育論』, 旭屋書店, 296p.  
 商工労働部観光リゾート局 (2001):『沖縄県観光要覧 平成12年度』, 170p.  
 すくえあ (2001):『沖縄のガイド&マップ おきなわの基地と戦跡』, 1P  
 山下晋司 (1999):『バリ 観光人類学のレッスン』, 東京大学出版会, pp.113-117.  
 山村順次・浅香幸雄 (1974):『観光地理学』, 大明堂, pp.11-36.  
 山村順次 (1990):『観光地域論 地域形成と環境保全』, 古今書院, pp.1-6.